

弥生中期 BC1～AC1 半 後期 AC1 後半～3 世紀半 古墳時代 前期 3 世紀後半～4 世紀 中期 4C 末～5 後期 6・7 世紀

4.

徳島・阿波 弥生の鍛冶工房 矢野遺跡を訪ねる 2010. 2. 6.

弥生時代中期末から北九州と時期をほぼ同じくして鉄器生産を始めた鍛冶工房



西側の山側宮谷古墳より国府地区 矢野・徳島平野を眺める 2010. 2. 6.

最近 気になっている製鉄関連遺跡があった。

日本で製鉄が始まる前 弥生中期末頃 北部九州と時をほぼ同じくして鉄器生産をはじめた東瀬戸内 徳島 吉野川下流域南岸の矢野遺跡・名東遺跡や庄・蔵元遺跡。古代の海岸線に近い山裾 鮎喰川沿いの鍛冶工房群である。

古代になるとこの鮎喰川流域には阿波国府が置かれ、阿波国の中心として引き続き発展してゆく。

昨年淡路島で発見された弥生時代後半の国内最大級の鍛冶工房「垣内遺跡」とこれらの鍛冶工房遺跡群との関係はどうか？

卑弥呼の時代を経て初期大和王権の成立に大きな役割を演じたといわれる「阿波」。その力の源泉は阿波の鉄器生産ではなからうか・・・

また 矢野遺跡の古墳時代前期の鍛冶工房跡からは瓶に収められた砂鉄が出土している。

日本で砂鉄が鉄鉱石とともに製鉄原料として認識され、製鉄が始まるのは6世紀。矢野遺跡で砂鉄が発見される同じ頃 日本各地の製鉄関連地で墓に砂鉄が副葬される例が見つかっていて、3世紀頃 砂鉄は「砂鉄」として認識され、鍛冶の副原料ないしは初期的な製鉄がトライされていた可能性などを秘めている。まだ、日本で製鉄が始まらぬ時代 朝鮮半島の鉄素材の供給を受けて、拠点地域での鉄器生産が始まり、日本の国づくりが進む時代である。



朝鮮半島・北九州から 四国・瀬戸内そして大和へと続く「鉄の道」の中間拠点にあり、当時の先端技術を有して、日本の初期大和王権成立に役割を果たした阿波。 そんな時代に鍛冶工房で瓶に入れられた砂鉄が出土した。 この砂鉄は何を意味するのか??? 頭にある「砂鉄の謎」

徳島へ行けば 何かイメージが湧くかも知れぬ。

古代阿波の中心部 そして 阿波の鍛冶工房群の存在地はどんなところなのか ぜひ見ておきたい所でした。

2月6日 風は強いが ぽかぽか陽気の土曜日。淡路島から鳴門大橋を渡って徳島へ。

何度も通った道ですが、いつも徳島は通過点。縄文から古代へ拠点集落として継続する矢野集落遺跡があり、そして古代には阿波国府があった鮎喰川流域の国府地区に行くのは初めて。 今 矢野遺跡は今 どうなっているのだろうか・・・出土遺物等は資料で見られるのですが、その遺構はほとんどわからない。 インターネットなどで調べて、矢野遺跡出土品などを含め、阿波国の歴史展示がある板野 IC のすぐ近くの徳島県埋蔵文化財センターによって、それから国府地区 矢野遺跡を見に行く

ことにする。 この矢野遺跡のすぐ近くにも徳島市立考古館があるので 色々教えてもらえるだろう。

あとは 足の向くまま 風来坊。 今 矢野遺跡はどうなっているのか・・・

また、四国に上がった中央構造線がまっすぐ東西に走り抜け、その中を大河吉野川が流れ下ってくる。

縄文から古代 前方には大きな入り江の海が広がっていたこの地区。この山裾に阿波の豪族たちが築いた阿波国の前方後円墳。

そして眼下に広がる阿波国・阿波の海。

今は吉野川が流れ下る広大な徳島平野が、どんな風に見えるのか・・・・。 これにも 興味深々である。



神戸→淡路島→大鳴門橋→（高松自動車道）→板野 IC →徳島埋蔵文化財センター→吉野川六条大橋→石井町→
→鳥坂 T 字路を南へ 国府地区に入る→ 国府町矢野 徳島市考古館→矢野古墳→阿波史跡公園・宮谷古墳→
→国分寺→国府町を南北に貫く国道 192 矢野遺跡〔矢野銅鐸出土地・鍛冶工房跡地〕→国道 192 を北へ→
→観音交差点付近〔阿波国府 観音寺遺跡〕→観音 T 字路を東へ徳島市街地へ→上鮎喰橋→徳島大蔵本キャンパス→
→〔庄・蔵本遺跡〕→徳島駅→国道 11 号線を北へ→吉野川大橋→鳴門 IC→鳴門大橋→神戸



吉野川下流域の南岸 鮎喰川の扇状地に広がる阿波の中心 国分地区

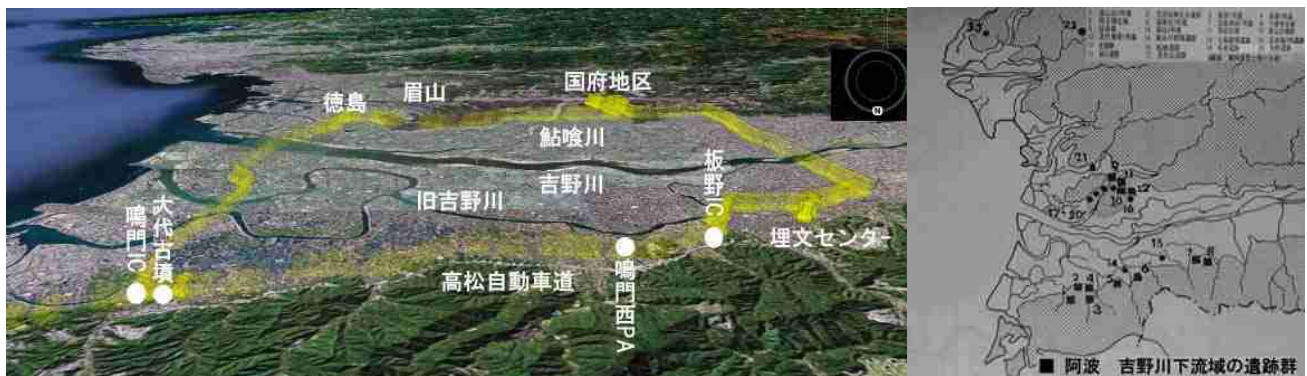
印は Walk 経路を示す

写真中央を上下に南から北へ国道 192 そして 国府の T 字路を東へと続く

この道の下で矢野遺跡・阿波国府跡（観音寺遺跡）などの遺跡が出土した

4.1. 板野古墳群の山麓にある徳島県埋蔵文化財センターへ

まず 矢野遺跡・阿波国のアウトラインを頭に入れる



Google earth より 吉野川下流域 3D 地図と吉野川が流域遺跡分布図



徳島 walk map

吉野川・徳島平野を望む板野町の山裾にある徳島県埋蔵文化財センター

神戸から約1時間ちょっとで淡路島から鳴門大橋を渡ると四国徳島県にはいる。徳島へは鳴門 IC で降りて南へ行けばいいのですが、通り越して 矢野遺跡の資料ならびに予備知識をもらいたくて、次の板野 IC のすぐ西にある徳島県埋蔵文化財センターへ向かう。高速道路は阿讃山脈の東端の山並みの南側山腹を西に向かう。鳴門の市街地や徳島の平野部の向こうに徳島のシンボル眉山が時折みえる。鳴門 IC を過ぎてすぐ 道路に立ちはだかる大きな前方後円墳の下を眼鏡状にくりぬいたトンネルで抜ける。(大代古墳) この高速道路が走る阿讃山脈の山裾 鳴門から板野にかけては 吉野川北岸の王城の地 鳴門板野古墳群が点々と続くところで、古墳の多い古代阿波国域へ入ったと実感する。

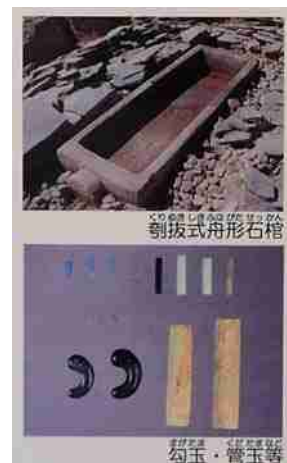
鳴門西 PA に車を止めるとそこに先ほど潜り抜けた大代古墳の案内板がありました。

また、この鳴門西 PA からは吉野川河口に広がる広大な徳島平野が見渡せました。



大代古墳

鳴門西 PA にある案内板より



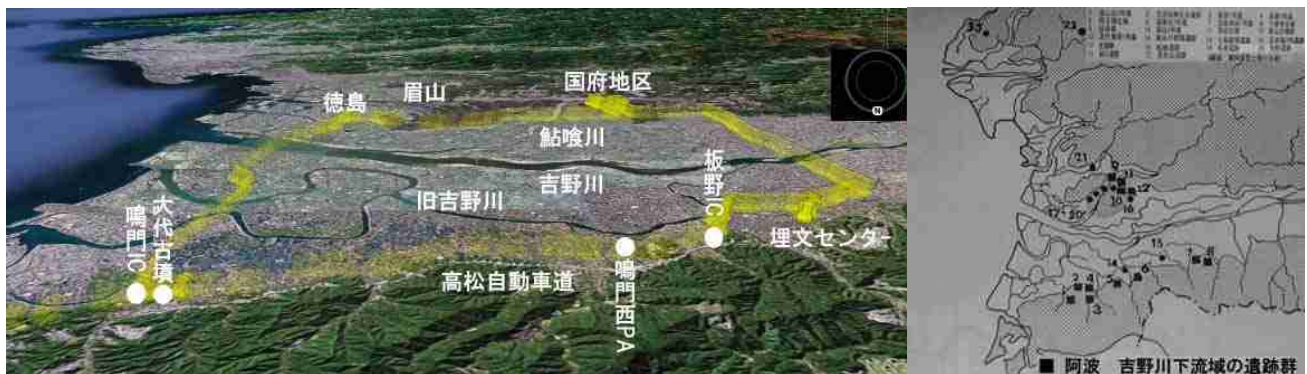
4 世紀末の築造と考えられる全長約 54m の県内最大級の前方後円墳。

後円部中央の竪穴式石室からは「刳拔式船形石棺」と勾玉・管玉など多くの副葬品が見つかった



鳴門西 PA から眺める徳島平野 2010. 2. 6.

中央をゆったりと吉野川が流れ 平野の向こうに眉山の山並みが見える



Google earth より 吉野川下流域 3D 地図と吉野川流域遺跡分布図

こちら側の山裾と向こう側の山裾には 弥生の中期から古墳時代にかけて大きな集落が数多くあり、阿波の豪族の王城の地として、多くの古墳が築かれたという。

また、向こうに見える眉山の山並みの麓から西へ山裾に広がるのがこれから行く国府地区。 矢野遺跡など阿波の国の中心部である。今は この徳島平野を家並みが多い尽くしているが、かつてはこのあたりまで海が入り込んでいて、大きく東に開ける海原が見えたに違いない。そして、北部九州と大和を結ぶ交易路の東四国の玄関口として、多くの人たちが集まってきたという。

鳴門西 PA を出発するとすぐに板野 IC でここを出て一般道を埋蔵文化財センターに向かう。 カーナビ任せの気楽なドライブである。この高松自動車道はここから大きく北へ曲がって山を越えて四国の海岸沿いに出て高松へ向かう。 一方この板野 IC から南約 3Km の



高松自動車道 板野 IC 周辺

ところで徳島から吉野川沿いに中央構造線の中をまっすぐ東西に松山まで貫く徳島自動車道（四国縦断道）の藍住 IC があり、高知や松山へ向かう車はこの板野 IC から藍住 IC に乗り継ぐ。地形図をみれば、ここが東西に直線で走り抜けられる直線道路であることがよくわかる。

また、余談ですが、徳島の人々は高松自動車道をそう呼ばず、まだ未完成ですが、小松島・徳島から高松を経て高知への全線開通を期待して 四国横断自動車道と呼び続けているそうである。

板野 IC を出て 高架の専用道路をまっすぐ南へ一般道路に出て旧吉野川を渡ったところで西へ曲がって 再度橋を渡って北に戻り、JR 板野駅前の十字路を埋蔵文化財センター・歴史文化公園の案内板に従って西北の山の尾根筋へ回り込んで、登ったところに立派な埋蔵文化財センターの建物がありました。

正面には矢野遺跡から出土した大きな矢野銅鐸と西長嶺遺跡から出土した顔が描かれた分銅形土製品が阿波国を代表するモニュメントとして出迎えてくれる。 またすぐ脇 左手の小高い丘が阿波を代表する古墳のひとつ西山谷 2 号墳で、この埋蔵文化財センターが立つ丘を含め、東西に並ぶ亜讃山脈の山裾で鳴門板野古墳群の一角である。

ちょうど 10 時。西山谷古墳の見学を後回しにして、まず埋文センターに行く。



板野 IC 周辺 旧吉野川の橋から JR 板野駅前十字路



大きな矢野銅鐸と人の顔が描かれた分銅型土製品のモニュメントが出迎えてくれる徳島県埋蔵文化財センター

埋蔵文化財総合センターはそれぞれの県にある埋蔵文化財の調査・研究・整理・保存するとともに、一般にも出土品や資料を公開している。歴史・遺跡のことは埋蔵文化センターへ行けば大抵のことは教えてもらえる。

入口を入ると「どうぞ どうぞ 神戸からですか」とにこやかな受付の女性が気持ちいい。

「矢野遺跡の位置特に鍛冶工房跡から出た砂鉄の資料をほしいのですが・・・」と目的を伝え、「砂鉄のことはよく知らないが、矢野遺跡の関係は展示があるのでどうぞ。 学芸員の人をお呼びしましょうか」と丁寧に言ってくれる。

それをお断りしてちょうど開催されていた四国 4 県の埋文センター共同の巡回展「続・発掘へんろ 旧石器時代～縄文時代の石器や土器」と常設展を見る。巡回展では四国各地から出土した旧石器・縄文時代の遺物が紹介されている。 四国の旧石器や縄文時代についてはあまり知りませんでしたが、こんなにあるのかと。 また、阿波 矢野遺跡の縄文土器には東北の縄文土器にはないシンプルな美しさ。矢野遺跡は鉄器生産をやっていた「村から国へ」を代表する阿波弥生の大集落遺跡とのイメージで来たのですが、縄文時代にもすでに中心的な集落遺跡だったこと始めて知りました。



矢野遺跡の縄文土器と 四国の縄文遺跡分布



常設展示室の入り口にも矢野銅鐸の巨大なレプリカが展示され、壁には東阿波の土器群が飾られ、床面には地中に埋蔵されたままの姿で矢野銅鐸が飾られ、朱を精製するジオラマも。そしてこの阿波・吉野川南岸周辺集落で加工された鉄器類も。

この時代阿波国が華やいでいたことが、よくわかる。

縄文時代から近世まで 徳島県のさまざまな歴史・遺跡出土品が展示されている。その中心は阿波国が最もクローズアップされた弥生中期から古墳時代の吉野川流域の文化や遺跡からの出土遺物が展示で、その中心的遺跡として矢野遺跡から出土した矢野銅鐸や土器なども展示されていました。



弥生から古代へ 村から国へ 阿波の華やかな時代を展示開設した常設展示

残念ながら 矢野遺跡の鍛冶工房から出土した「壺に入った砂鉄」は残念ながら見られませんでした。知らなかった阿波の国の姿を知ることができました。

吉野川から産する青い結晶片岩を積み上げて竪穴式石室を築造する大型古墳築造技術

四国山地から産する辰砂を精製して作る「朱」の生産

特産の蛇紋岩を加工する勾玉工房

これら阿波の特産品・先端技術を可能とした工具の提供を含めた鉄器の生産等々

また地中に非常に丁寧に埋葬されていた巨大な銅鐸も

阿波が有したこれら先端技術が弧帯文土器に代表される阿波独自文化醸成の中で育まれた。

また、それらの中心的存在が、吉野川下流域南岸 鮎喰川の扇状地に縄文から古代へとずっと続く矢野集落遺跡。

鍛冶工房・玉造工房・朱の精製工房などがあったという。

あまりよく知らなかった阿波国が初期大和王権を支える主要連合国のひとつとなったベースがよくわかりました。

展示を見終わって出てくると思いもかけず、この埋文センターの植地主任さんが矢野遺跡への地図持って待ってくださっていた。「矢野遺跡から出土した砂鉄はこの埋文センターに保管されているのですが、常設展時はしていないのですよ。

ちょっと待っていてください。お渡しできる矢野遺跡の鍛冶工房についての資料ちょっと探してきます。」と資料「5. 徳島における導入期鉄器の様相 栗林誠治」の資料をコピーしていただいた。本当にうれしい出会いでした。

展示の内容を含めた阿波国ならびに矢野遺跡の概要については 埋文センターの展示やいただいた資料ならびに手持ちの資料などを整理して その概要を下記資料にまとめ転記しましたのでそちらをご覧ください。

■ 阿波国 概要 ■ 矢野遺跡概要

「弥生の鍛冶工房 矢野遺跡」といっても、何もないのでは・・・」と思って やってきましたが、矢野遺跡が阿波の中心的遺跡で鍛冶工房だけでなく 色々な側面を持っていることしるばかりでなく、「やっぱり 鉄だ」と 吉野川を挟んで南側矢野遺跡のある国府地区へ行くのが楽しみに。

1時間ちょっと埋文センターを出て、すぐ前の西山谷2号墳の見学へ
私は 古墳にはほとんど知識がないのですが、3世紀中葉 徳島を代表する国内最古段階の竪穴式石室を持つ円墳で徳島特産の結晶片岩という薄青の石を積み重ねて墓壇を四角く取り囲んで覆うように石室が作られ、次の古墳時代の古墳築造技術の基になった阿波の技術と教えてもらいました。

丘を登ると円墳の頂上部の土が取り除かれて、竪穴石室の中が見える状態で展示されていました。「朱」が敷き詰められた刳拔式木棺が納められ、中国製青銅鏡・鉄剣・鉄族・鉄や土器などかの副葬品が出土。



鳴門板野古墳群 3世紀中葉の円墳 西山谷2号墳

徳島特産 薄青の平板な結晶片岩を積み重ねて造られた日本最古級の竪穴式石室

これから何度となく見る平べったい青い石 徳島原産の「結晶片岩」。

「この青い石の古墳 どこかで見たぞ」と。

ちょうど紀淡海峡をはさんで東にある紀ノ川か流域にある 700 基を越える岩橋千塚古墳群の石も紀ノ川から出る結晶片岩

大多数がもっと後の時代の横穴式石室なのですが、この青い石が幾重にも積み重ねて石室が作られていました。

また 大和の古墳でもこのような薄い平板石である結晶片岩を積み重ねた構造を見たように思う。

木棺に敷き詰められた朱 副葬品ならびに青色の結晶片岩を用いた緻密な築造などこの古墳が阿波を収めた豪族の権威を物語り、この技術また聖なる石 石室材料として 結晶片岩が大和へ引き継がれて行ったのだろう。



阿波国の情報をたっぷり頭に叩き込んで、矢野遺跡のある国府地区へ

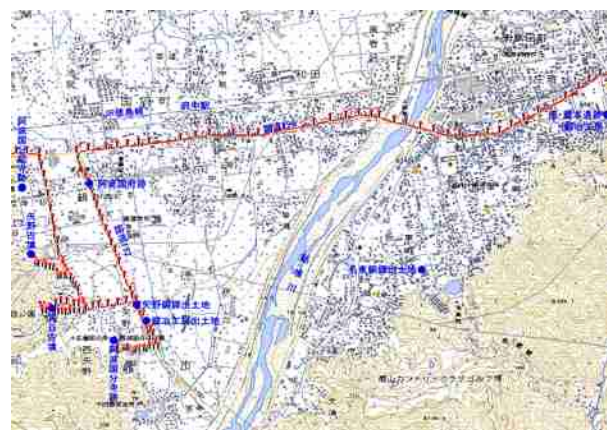
地図を開くと ここから まっすぐ南へ 吉野川を渡って行けば 国府地区へ到達する。 国府町矢野の地域全体が矢野遺跡で看板も何もないと聞きましたが、その中心地に徳島市立考古資料館があるので、そこへ行けば また 新しい情報が入れる。カーナビに入れると一発に道順教えてくれる。 便利な時代で 国府地区へ向かう。

四国山地から流れ出る鮎食川の扇状地に開けた阿波王城の地 国府

4.2. 弥生の大集落 矢野遺跡のある国府地区へ



宮谷古墳から眺める矢野集落 写真中央が矢野遺跡周辺



国府町矢野 矢野遺跡周辺 Walk 図



弥生時代の竪穴住居跡群

矢野遺跡 竪穴住居跡



国府町矢野 矢野遺跡周辺 Walk 図



吉野川の北岸にある埋蔵文化財センターから県道34号線をまっすぐ南へ。

10分ほどで 吉野川を渡たる六条橋。ちょうど川のところが高くなっているの、南岸地区が見渡せ、道は南の丘陵地までま

っすぐ続いている。 前方の左手 右手から続く山並みの東端に形のいい山が見えている。

この山が国府地区の西側を南北に連なり、古墳群が点在する気延山。この山を南に回りこんだところが、鮎喰川の扇状地に開けた国府 矢野地区である。まだ 随分向こうに見える。



吉野川南にかかる六条橋南岸から 吉野川南岸地区を眺める 左側 西端に見えるのが気延山



六条橋から見る吉野川下流

左手には広大な徳島平野の町並みが続いているが、この辺り古代には吉野川の河口地区。幾筋にも分かれた暴れ川吉野川の中州が広がり、その向こうは大海原。現在の徳島平野の中心部はまだ広い海だっただろう。



六条橋南端から南側の眺め

気延山から東西に伸びる丘陵地に向かって石井の町並みを通り抜け、飯尾川の橋を渡る頃には気延山の山並が随分近づいた。橋の左手はもう国府地区の一角である。 少し南まで行って 気延山の山裾に沿って走る JR 徳島線を渡ったところでＴ字路になり、左へ曲がると気延山の山腹がすぐ前方。 山裾を峠で乗り越えと １９２号線の交差点手前のＴ字路で、ここに考古資料館・阿波史跡公園の案内標識があり、ここを南におれるとまもなく気延山の山並みを背に大きな駐車場のある立派な考古資料館が建っていました。

考古資料館のすぐ西の気延山の尾根筋に矢野古墳があり、左には矢野の集落からさらに徳島平野の町並みが続きその背後に徳島の象徴眉山が見えている。





気延山の山裾に建つ徳島市立考古資料館



気延山山裾 矢野古墳横から見る考古資料館・矢野集落
背後に見えるのが眉山である



国府地区 矢野遺跡周辺の walking map

考古資料館に行くと「神戸からようこそ」と大歓迎で

「この考古博物館の東側一帯が矢野銅鐸などが出土した弥生の大集落。この考古博物館に出土品など展示しています。

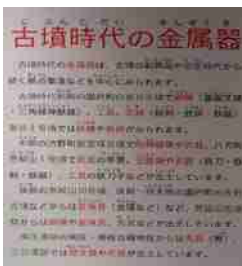
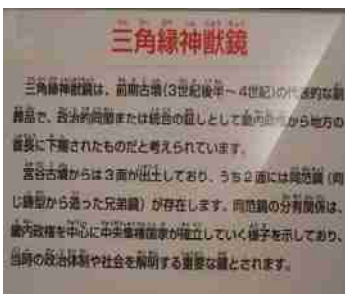
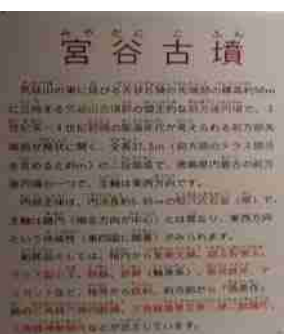
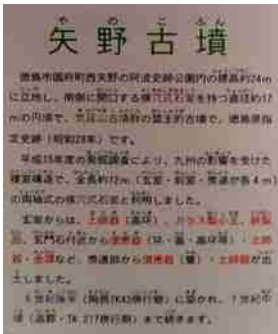
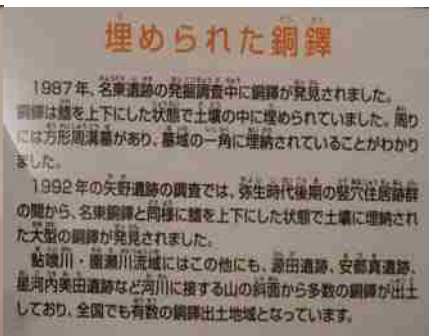
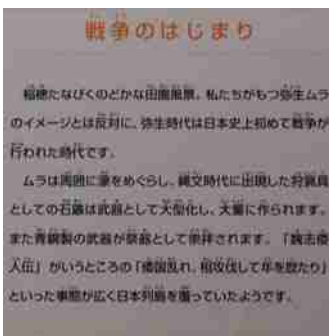
すぐ裏の丘を登ったところが矢野遺跡。 石室の中が見られるので ぜひ。 また 南へ少し行ったところの歴史史跡公園の中に大和との関係が深い前方後円墳宮谷古墳があります。 まず 展示をみて それから まわってください」とアウトラインをガイドしてもらった。

この考古資料館には この地 矢野遺跡を中心とした鮎喰川流域の弥生の大集落遺跡群と気延山古墳群が パネルと出土品展示でわかりやすく展示されていました。

徳島市立考古資料館 展示

村から国へ

鮎喰川流域の弥生の大集落遺跡群と気延山古墳群



展示されていた遺物・パネルを並べましたが、順不動です

展示を見終わって

「一番行きたいのが、矢野遺跡の中で 砂鉄が出土した鍛冶工房の場所 そこに立ちたいのです。」

どこか ご存知ですか・・・」と声をかけると、「鉄の話はよく知りませんね。今日は館長が留守でよくわからぬ」と。
「資料に銅鐸出土地から南へ 200m ほどの場所と記載されているのですが・・・ 」という
「それなら判ります」と地図のコピーに目印とルートを書き入れ、国分寺を含めこの矢野遺跡周辺の古墳や遺跡について
もう一度解説しながら walking マップを完成させていただきました。本当に感謝。
おかげで、うろうろすることなく矢野遺跡周辺の walk を楽しめました。

4.3. 「村から国へ」弥生の大集落 矢野遺跡のある国府地区 walk

阿波の先端技術〔玉造り・朱・鉄器〕を育んだ弥生の大集落遺跡 矢野遺跡と
大和との密接な関係を示す徳島県最古の前方後円墳 宮谷古墳



徳島市考古館→矢野古墳→阿波史跡公園・宮谷古墳→国分寺→

国府町を南北に貫く国道 192 矢野遺跡〔矢野銅鐸出土地・鍛冶工房跡地〕→国道 192 を北へ→

観音交差点付近〔阿波国府 観音寺遺跡〕→観音 T 字路を東へ徳島市街地へ→上鮎喰橋→

徳島大蔵本キャンパス〔庄・蔵本遺跡〕→徳島駅→国道 11 号線を北へ→吉野川大橋→鳴門 IC→鳴門大橋→神戸

● 気延山古墳群の盟主 矢野古墳へ

考古資料館の直ぐ西側 100m の気延山の山裾にある小さな丘が矢野古墳。駐車場を出て直ぐ 気延山へ登ってゆく道が整備されていて、その右手の木々に包まれた丘が矢の遺跡である。この道を少し登った横に矢野古墳の標識があり、その上に古墳の入り口が見えているが、道は一段上のテラスまで 薄青の結晶片岩が敷き詰められた階段状の道が整備され、テラスから北へ林の中回り込んで古墳に入る。

また、テラスから南の阿波史跡公園へ気延山の古墳群をめぐる遊歩道が付いている。

大和王権の支配下に入り阿波国がすでに成立している古墳時代後期の横穴式石室を持つ古墳であるが、石室内に入れる数

少ない遺跡のひとつで、この地を収めた豪族 気延山古墳群の盟主的存在の古墳で、北九州で流行した複式石室を取り込んだ古墳としても貴重なものである。また、石室の奥壁には吉野川特産の巨大な結晶片岩の一枚岩が使われ、この地の豪族の古墳



矢野古墳への登り口 右手の森が矢野古墳

の風格を示している。

考古資料館のすぐ西 100m ほどの気延山東山裾 徳島市国府西矢野の気延山の山裾標高約 24m に立地し、南側に開口する横穴式石室を持つ直径約 17m の円墳。石室の規模や構造から 6 世紀後半に築かれ、7 世紀中頃まで追走が続いた気延山古墳群の盟主的存在の古墳である。

平成 15 年の発掘調査により、九州の影響を受けた複室構造で、全長約 12m（玄室・前室・羨道が各 4m）の両袖式の横穴式石室と判明。奥壁には「阿波の青石・結晶片岩」の 1 枚岩が使われている。

玄室からは土師器（高杯）・ガラス製小玉・鉄製品・玄門石付近から須恵器（杯・蓋・高杯等）・土師器・金柑など、羨道部から須恵器（甕）・土師器が出土。



矢野古墳の入口



矢野古墳の奥壁 結晶片岩の一枚岩



薄青の結晶片岩を積んで創られたすばらしい道が上のテラスへの道が整備 2010. 2. 6.

写真左道標の上が矢野古墳の入り口であるが、崩れ止めで立ち入り禁止。古墳へは上のテラスから巡る

青色の結晶片岩をつんで作られた登山道 もったいないと感じる立派なすばらしい道である。

今回徳島へくるまで 意識していませんでしたが、結晶片岩は「阿波の青石」と呼ばれ、後には墳墓・建築用材・庭石と数々の用途に使われる吉野川特産品。

古墳時代阿波の豪族の墳墓に使われた「王者の石」で、大和の古墳にもその築造技術と共に使われた。おそらくそのことを踏まえて この気延山古墳群・矢野古墳の入口への道にもこの結晶片岩が使われたのだろう。



阿波の青石 吉野川特産の結晶片岩

美しい青石で作られた階段を上りきると展望テラスになっていて、矢野の町並みがよく見える。ここまでは木々が切り払われてオープンであるが、ここからは左右に山腹に沿って林の中の道が続いている。南へ行くと阿波史跡公園への気延山古墳群の散策路。北へ行くと矢野遺跡である。

林の中の小道を少し行くと矢野遺跡。 こんもり盛り上がった丘の脇に矢野遺跡の案内板があり、南側へ少し下りながら回り込むと矢野遺跡の横穴式石室の入口である。 古墳の縁をめぐる円墳であることがよくわかる。

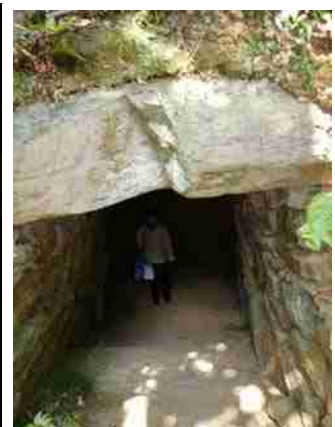
前室のある複式の石室で奥壁まで約 12m 近く続いているが真っ暗。入り口・天井・奥壁には大きな一枚岩の巨岩 側壁には緻密に加工された石を積み重ねて石室が作られている。 すべての石が阿波の青石・結晶片岩かどうか知りませんが、大半がそのようだ。少なくとも奥壁は結晶片岩の一枚岩と書かれている。 この複式石室の構造は 北九州の石室構造の影響だという。



テラスから林の中へ入ってゆくと直ぐに矢野遺跡の横に出る



古墳時代後期の円墳 矢野古墳 弧状に南へ半周したところが石室の入口 2010. 2. 6.



矢野古墳の石室 多分阿波の結晶片岩が多用されているのですが 石室の石組が美しい

元のテラスのところへ戻ると考古資料館から矢野の家並みの向こうに眉山の山並みが遠望される。

現在矢野古墳は林の中にあり、木々が邪魔して 見通しが利かないのですが、当時 古墳からは前方に広がる阿波国府から阿波の国全体が見晴らせ、その向こうに紀淡海峡の海がひろがっていたのだろう。



矢野古墳横のテラスから 矢野の町並み・そして その向こうに眉山が遠望される 2010. 2. 6.

● 大和との強い結びつき 三角縁神獣鏡が出土した前方後円墳 宮谷古墳から阿波国分寺跡へ



大和との強い結びつきを示す前方後円墳 宮谷古墳



阿波史跡公園 弥生の村



山の手前に国分寺が見える



阿波史跡公園の入口 伊魔離神社とその横の登り口



ここから歩いても直ぐなのですが、阿波史跡公園にも大きな駐車場があり、矢野遺跡周辺をめぐるにはその方が便利と教えてもらって、考古資料館の駐車場に戻り、車で阿波史跡公園へ向かう。

眉山を眺めながら 道幅の狭い矢野の集落の中を山裾を南へほんの少し走ると石の鳥居のある辻にでる。矢野古墳のある枝尾

根からひとつ南の枝尾根の端で、ここにこの枝尾根を登る阿波遺跡公園・宮谷古墳の案内標識が付いている。

この尾根筋から矢野古墳までの気延山の山腹一体が阿波史跡公園として整備されている。

尾根筋の急坂を登って史跡公園の中に入っていくと道の右の開けたところに木々を取り払われた大きな丘が見える。

これが三角縁神獣鏡が出土し、大和との強い結びつきを示す前方後円墳 宮谷古墳で、そのまま道なりに尾根筋を北に乗り越えた奥に弥生時代の竪穴住居を復元した弥生の村と広い駐車場がありました。

また、この尾根筋一体にも幾つも小さな古墳がありました。伊魔離神社の裏手にも小さな古墳がありました。



古墳は墳丘前方部を東 後円部を西のほぼ東西に横たわっていて、古墳の北側からよく整備された斜面を登って古墳へ上がることができる。

右の写真の中央台形状に見えるのが宮谷古墳の後円部の端で、北側から斜面を登って古墳の西端にでる。

ちょうど古墳の西の突端部でそこに古墳の案内板があり、まっすぐに墳丘の後円部に登れる。



阿波史跡公園 遊歩道から見た宮谷古墳 正面奥台形の丘が宮谷古墳



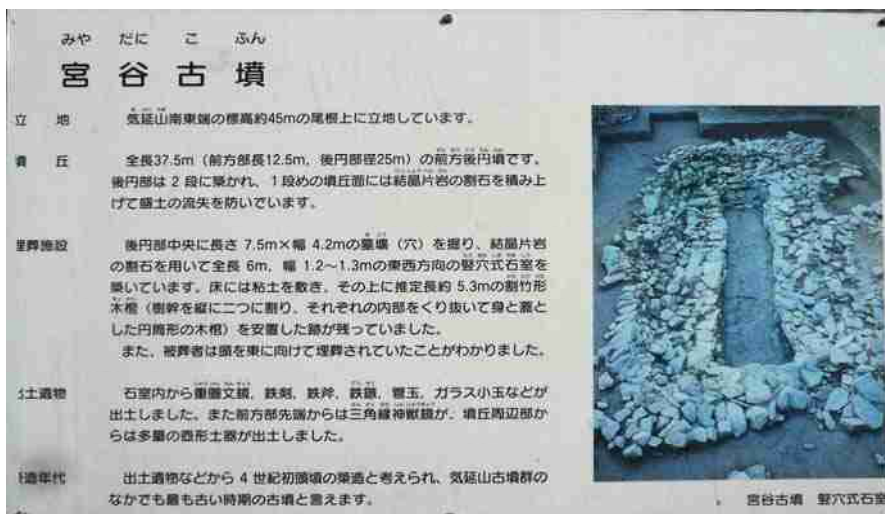
宮谷古墳の後円墳丘の登り口

古墳はここから写真奥東へ横たわっている

案内板のあるところが墳丘の前方部と後円部のくびれ部かも知れぬと錯覚していましたが、前方部は反対側の木々が頭を出しているところ。斜面を登る時に眺めていたところでした。のところから、一度戻って 宮谷古墳全体を再度確認して、それから墳丘に登る。 墳丘の上から眼下に広がる阿波国のパノラマを見るのも楽しみ。



宮谷古墳全景 左側が墳丘の前方部・右側が後円部で東西方向に横たわっている。



【解説】 4世紀初頭 大和との強い結びつきを示す三角縁神獣鏡を持つ阿波最古級の前方後円墳 宮谷古墳

墳丘の上に上がると東の方向 阿波国全体のパノラマが広がっている。

前方部の端には木々があり、眺望がかけれるので、一段下に降りると広大な阿波国 徳島平野全体が見え、標高が低いので紀淡海峡の海は見えませんが、紀伊半島側の山が奥に薄く眺められる。

ここも矢野遺跡と同じく阿波国全体を眺められる場所。

大和初期王権の連合国のひとつとなった阿波の首長が三角縁神獣鏡をもらって 自分の支配する阿波国全体を眺められるこの地に前方後円墳を築いた。阿波の国力を誇示するかのように阿波の特産 玉類や鉄族・やりかん・板状鉄斧などの鉄器を傍らに 朱で真っ赤に塗り固められた木棺に収まり、「王者の石」阿波の青石（結晶片岩）を積んで造られた竪穴式石室の中で眠る。阿波が大和の連合国に提供したに阿波の先端技術に包まれて、大和連合の象徴 巨大な前方後円墳の中で眠る。阿波の王が大和にも国力を誇示する目的もあったのだろう。



宮谷古墳 墳丘の前方部



宮谷古墳 墳丘の前方部から眺めた徳島平野 2010. 2. 6.



矢野の田園地帯を南北に貫く国道 192 号線

西矢野の集落の中にある小さな寺であるが、今も四国八十八箇所 15 番札所として繁栄している。

古代の阿波国分寺は 現在の国分寺を中心に約 200m 四方の範囲に東大寺様式の伽藍が立ち並んでいたという。

境内の中にある建物の礎石や石碑など 随所に阿波の青石・結晶片岩。やっぱり 伝統の青石が随所に使われていました。

国分寺庭園では随所に青石を使ったすばらしい庭園ときましたすが、行けませんでした。

宮谷古墳のところから、山裾に下り、まっすぐ東へ集落を抜け、幅の広い国道 192 号線に出る。気延山の山裾に沿って田園地帯を南の鮎喰川の土手まで 国府矢野地区を南北に貫いている道でこの道の下全体が矢野遺跡だと聞きました。ちょうど出てきたところが矢野銅鐸出土地・鍛冶工房跡周辺と教えてもらいましたが、道路で駐車スペースを見定めながら少し南に下がり、阿波国分寺跡へ先に行く。



阿波 国分寺跡に建つ 四国 15 番霊場 国分寺

国分寺から再度 国道 192 号線に戻り、南から北へ。 砂鉄を出土した鍛冶工房跡に立つことを目指す。

考古資料館で矢野銅鐸出土を教えてもらったので、そこから 200m ほど南へ下がった国道 192 号線の道路上がほぼ 砂鉄を出土した鍛冶工房跡地である。

(家に帰って 資料を調べていたら 矢野Ⅱ群から出土した竪穴住居跡の分布図をみつけた。

その中に、砂鉄を入れた壺が住居内から出土し 3 世紀後半の竪穴住居（鍛冶工房）跡 SB 2044

弥生中期末 1 世紀後半にあった鍛冶工房跡 SB2037

をみつけ、正確ではありませんが 鍛冶工房跡が教えてもらった位置とほぼ同じ付近であると確認できました。)

先ほど阿波史跡公園からまっすぐ東に下った国道 192 号線矢野の信号から南に折れたあたり ひとつ南の信号周辺が鍛冶工房跡である。ちょうど国分寺の東側である。

西側に気延山の山並み 北には吉野川の向こうに阿讃山脈の山々 直ぐ南側には 気延山の連山の南端を巻いて北東へ方向を変えながら眉山のふもとを流れ下る鮎喰川。そんな気延山と鮎喰川で挟まれた広い田園地帯のど真ん中を南端の鮎喰川からまっすぐ北へ気延山の山並みに沿って国府地区を国道 192 がつらぬく。現在国道の中央部は幅の広い未使用帯でその両側に車道がつけられている。現在は完全に埋め戻されているが、この未使用帯の下に、矢野遺跡の弥生の大集落遺跡が眠っている。



壺に入れた砂鉄が出土した鍛冶工房があった跡地周辺 矢野遺跡Ⅱ



国分寺の南東側から国道北側を眺める



国分寺の南東側から国道南側を眺める

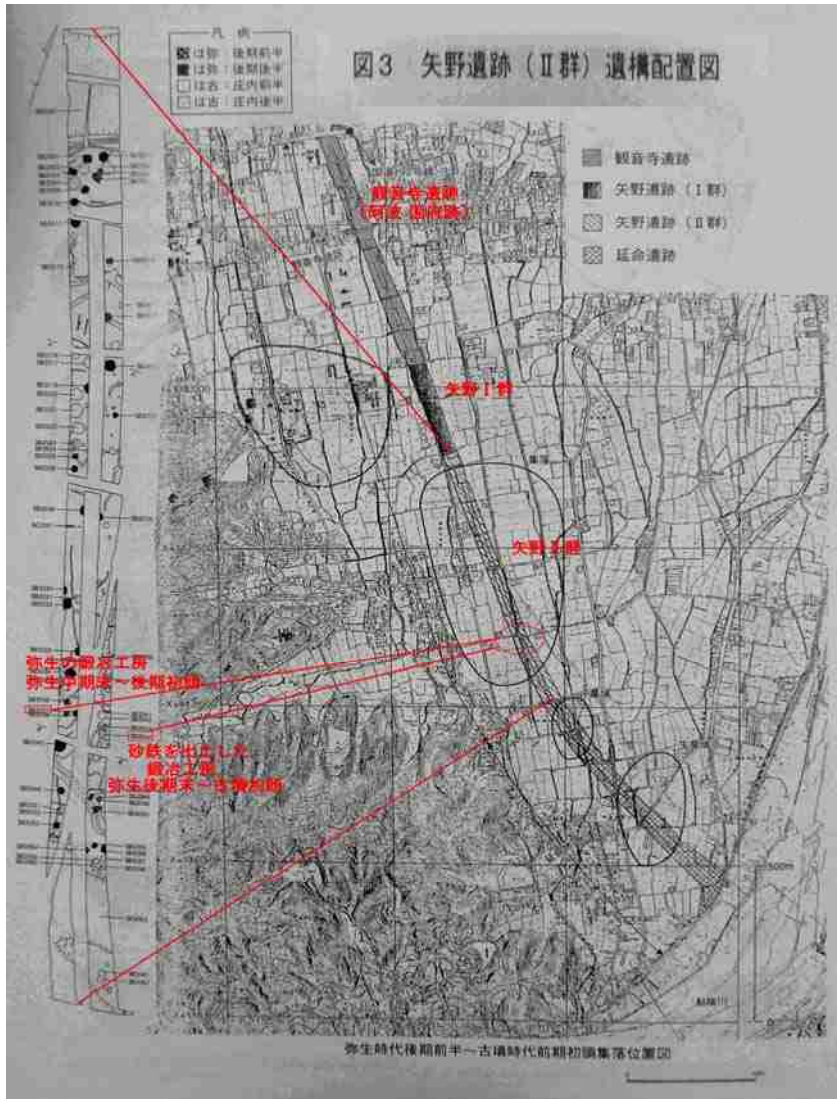
この一体からは 100 を超える竪穴住居が出土し、その中には竪穴住居内に鍛冶炉がある鍛冶工房跡が幾つか見つかっている。その中に砂鉄を出土した鍛冶工房がある。また、この鍛冶工房跡から北へ約 200m ほど行った国府町矢野の信号周辺からは矢野銅鐸が出土している。また、この道に沿う気延山連山の南端山裾には阿波国分寺 北端山裾には国分尼寺・国府跡があり、古代の王城の地。

道路中央に立って 埋蔵文化財センターや考古資料館でもらった資料やコピーしてきた手持ち資料とまっすぐ北へ伸びる何もない未使用空間を見比べ そこに建つ弥生の大竪穴住居群の家並みをイメージしながら往時を思い浮かべました。

砂鉄はこの工房でどんな役割を演じたのであろうか・・・

埋蔵文化財センターでいただいた資料 栗林誠治執筆「徳島における導入期鉄器の様相」 村上恭通著「古代国家成立過程と鉄器生産」から矢野遺跡から出土した鍛冶工房遺構を整理して下に転記しました。

【 矢野遺跡の鍛冶工房 】



砂鉄入り壺が出土した鍛冶工房 SB 2044

古墳時代初頭（庄内併行期）の鍛冶工房



隅丸長方形の竪穴鍛冶遺構

遺構のほぼ中央から3段に掘削されたIaタイプの鍛冶炉が出土。遺構内からは棒状切片や三角切片のほか砂鉄の入った壺が出土した



出土した壺入り砂鉄

砂鉄を出土した古墳時代初頭（庄内併行期）の鍛冶工房 SB2044 矢野遺跡 Ⅱ

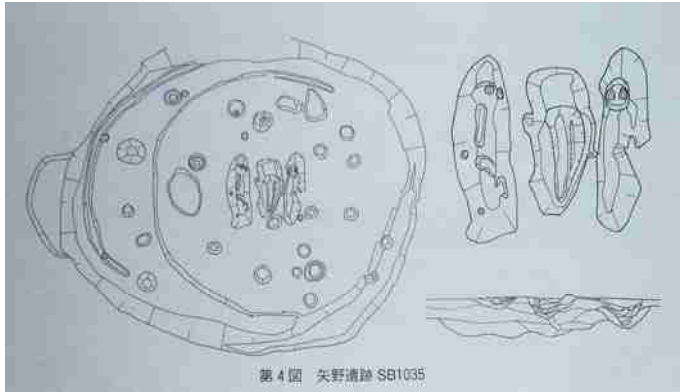
鍛冶工房 SB 2037

弥生中期末

砂鉄が出土した鍛冶工房の直ぐ横から出土 Iaタイプの鍛冶炉が出土している

3回立て替えられていた円形の鍛冶工房 SB1035

弥生中期末 矢野遺跡 I



矢野遺跡Ⅰ群から出土した3回立て替えられていた弥生中期末の鍛冶炉遺構 SB1035

砂鉄が出土した SB2044 鍛冶工房のある矢野遺跡Ⅱ群の北側に隣接する矢野遺跡Ⅰ群（同じ国道192号線の下）から出土した鍛冶工房遺構。時期は中期末で3回の建て替えが確認された。最初の住居は径6.0m 深度54cm。一回目住居廃絶後に南側2/3に重なって下端径5.8mの円形住居が構築されている。

6本柱構造で中央部から2つの鍛冶炉が検出された。北側鍛冶炉は長軸185cm 短軸60cm 深度10cmを測る長楕円形。中央部底面50X40cmが被熱により赤変している。また、南側からほぼ同規模の炭化物を充填した鍛冶炉が検出された。炉東端部に位置するピット壁面と底面が被熱により赤変している。両炉共に下部構造は共通していて、床面から35cm程度掘削後に炭化物と地山土を交互に充填している。こうした炉の形態からⅠ類鍛冶炉と推定されている。

周辺および柱穴から鍛冶滓・三角鉄片・鍛造剥片が出土。

3回目の住居はやや拡大し6.8X6.6mの規模で、2回目住居跡地に10cm程度の盛土を充填し構築。中央部に長軸185cm 短軸135cm 深度30cmの長楕円形鍛冶炉が敷設されている。鍛冶炉の下部構造は粘質土と炭化物層を互層に充填されている。炉壁面に沿って20cm内外の結晶片岩の割石が検出された。割り石は被熱による赤変が観察され、作業時には配されていた。炉内から鍛冶滓や鉄片が、貼り床部より鍛造剥片が検出されたほか、床面からは赤変した砥石・40cm大の円盤状結晶片岩の割石〔片面に赤色顔料が付着〕が出土。住居西側床面より、長さ14cm幅5cm厚さ2cm 重量500gを測る鉄素材が出土した。

（ 鍛冶工房であるとともに朱の生産工房にかかわった工房であったのかもしれない ）

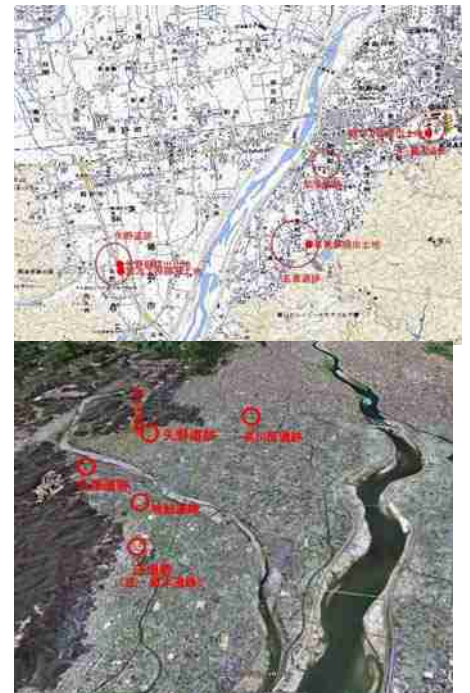
矢野遺跡の鍛冶工房が働いた弥生中期末～古墳時代初期にかけての矢野遺跡の鍛冶工房では 鍛冶の主体は金切加工による鋳・工具加工が主で、鉄素材の高温鍛造が行われていなかったようだ。

鉄素材の高温鍛造など高温鍛冶に付随して「砂鉄」が使われたのではないかと考えていたのですが、ここではその可能性は少ないようだ。

ただ、砂鉄が出土した矢野Ⅱ群の鍛冶工房 SB2044 より古いと推察される矢野Ⅰ群のSB1035 鍛冶工房からは鍛冶滓・鍛造剥片が出土しているし、この矢野遺跡から北東へ数キロ離れた現在徳島大蔵本キャンパスになっている「弥生後期末から庄内併用期時代の庄・蔵本遺跡（Ⅵ期）の3軒の竪穴住居からは 鉄滓・粒状滓が出土し、多数の鍛造剥片や棒状切片・三角切片・不定形切片などが10件の竪穴住居から出土した。この遺跡では高温鍛造などの高温鍛冶が行われていた」ようだ。ちょうど砂鉄が矢野遺跡の鍛冶工房 SB2044 に持ち込まれた時期と重なっており、高温鍛冶が始まる時期に砂鉄が現れることから、高温鍛冶の新しい鍛冶技術として砂鉄が持ち込まれたことも否定できない。

このほか この鮎喰川の扇状地周辺には 弥生中期末の名東遺跡（Ⅳ期）・高川原遺跡（Ⅳ期）・鮎喰遺跡（Ⅵ期）など鍛冶工房が出土した遺跡があるが、この地域に砂鉄が持ち込まれた例は矢野遺跡の鍛冶工房 SB2044 以外に見つかっていないようだ。

でも こんなに沢山の鍛冶工房が存在する阿波。 その勢力は本当に大きかったものと思われる。



鮎喰川流域の弥生時中期末から古墳時代初頭にかけての鍛冶工房分布

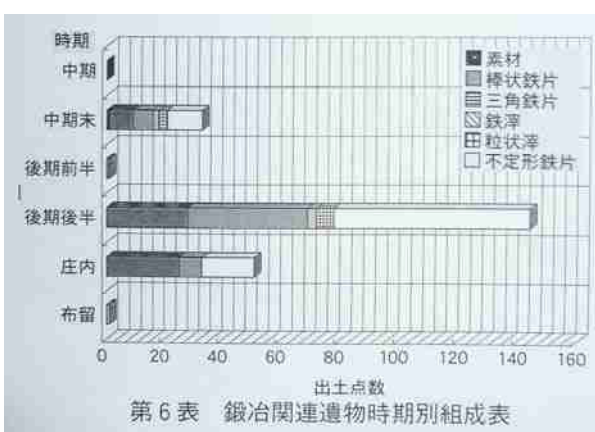
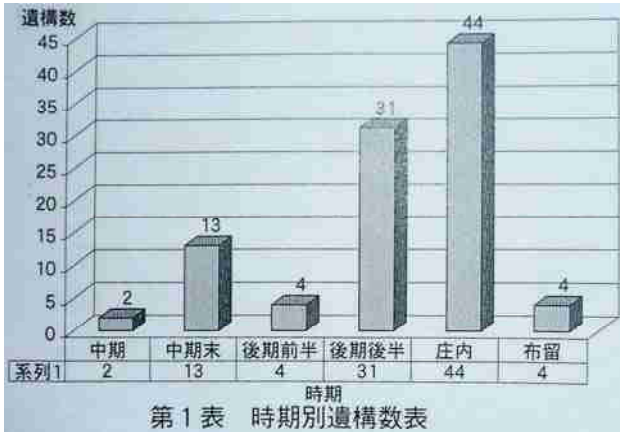
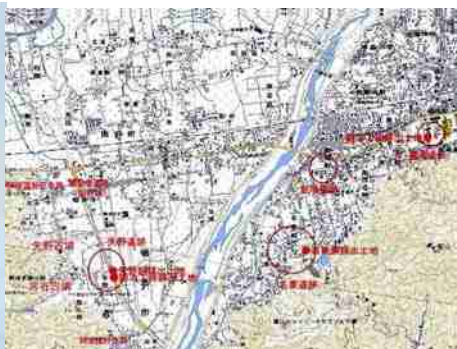
やっぱり 一口縄では行かぬ砂鉄の謎。 ゆっくり家に帰って資料を見直そうと思う。



考古資料館周辺の国道 192 矢野遺跡 I 群の周辺

【参考】徳島 導入期の鉄器

弥生中期後半 北部九州方面からの鉄素材の供給を受け、ほぼ北部九州度同時期に鉄器生産が阿波で始まる。阿波は日本の鉄器生産の先進地とみられ、吉野川下流域の鮎喰川の扇状地は矢野遺跡・名東遺跡などその中心地であった。



4.4. 徳島・阿波 弥生の鍛冶工房 矢野遺跡を訪ねる まとめ 鍛冶工房で出土した砂鉄の使い道は????



今回 この矢野遺跡の鍛冶工房で出土した壺入り砂鉄がひょっとして 国内での製鉄開始へつながる痕跡を示すのではない
か・・・と思いながら、弥生時代中期末から古墳時代前期にかけての鍛冶工房のある集落が点在する鮎喰川流域を訪ねました。
でも やはり、この地域の鍛冶工房での鍛冶は鑿で鉄板を切ったり曲げたりする比較的低温での原始鍛冶で、高温鍛造成形な
どの高温鍛冶の痕跡を見ることはできませんでした。

高温で鉄素材を鍛造成形したり、素材同士を鍛接して新たな鉄素材を作り出すことなどが行われていれば、それに砂鉄が使
われる可能性があると思っていますのですが、残念ながら、ちょうど砂鉄が矢野遺跡の鍛冶工房 SB2044 に持ち込まれた時期と
重なり、高温鍛造を行っていたと考えられている庄・蔵本遺跡からも砂鉄は見つかっていない。

この矢野遺跡で見つかった砂鉄の用途の可能性について 埋蔵文化財センターでいただいた資料 栗林誠治執筆「徳島におけ
る導入期鉄器の様相」では 次の3つの用途の可能性が示されていましたが、砂鉄の用途を見つけ出せなかったとしている。

1. 砂鉄を攻玉用研磨剤として捉える。

日本海沿岸など玉生産と鍛冶が密接な関係にあることはすでによく知られており、矢野遺跡でも玉加工が行われ
ていたことから、この砂鉄が研磨剤として持ち込まれた可能性がある。

ただし、玉生産工房の主要産地であり、鍛冶工房と一緒に出土する北陸・日本海側で
砂鉄が出土した例はない。

2. 赤色顔料(ベンガラ)の原料として捉える。

吉野川下流域では 名東いせきはじ目、辰砂を利用した朱の精製が行われてきた。赤色原料には朱以外に
ベンガラがあり、ベンガラの原料として砂鉄を想定することも可能であろう。

3. 砂鉄を鍛冶関連遺物として捉える。

徳島では後期以降も恒常的に鉄素材が供給されており、鍛冶技術の低下も認められない。

したがって、砂鉄を原料として 精錬鍛冶を行う必要はないと思われる。

ただ、この砂鉄は四国以外からの搬入品であることが確認されている。

日本で製鉄が始まるずっと以前の古墳時代の初頭から 何のために用いられたかは謎である「砂鉄」が「砂鉄と認識された形」で
出土する。また 弥生時代から製鉄があったように思える説話も日本各地に伝承されていて、この「砂鉄」がその痕跡ではないか？
日本では もっと早くから製鉄があったのでは・??の疑問があった。また、日本でスタートした砂鉄によるたたら製鉄はほかに類例
を見ない日本独自の製鉄棒であり、しかも突如5世紀後半ないし6世紀に出現する。

この「砂鉄の謎」が解けないと日本の製鉄のルーツが解けない。

しかも この鉄は日本の国づくりに欠かせず、朝鮮半島を巻き込んだ争奪戦。

初期 大和王権を支えた連合の絆はこの鉄の支配だったとも考えられており、古代日本誕生にも大きな影響を与えた。

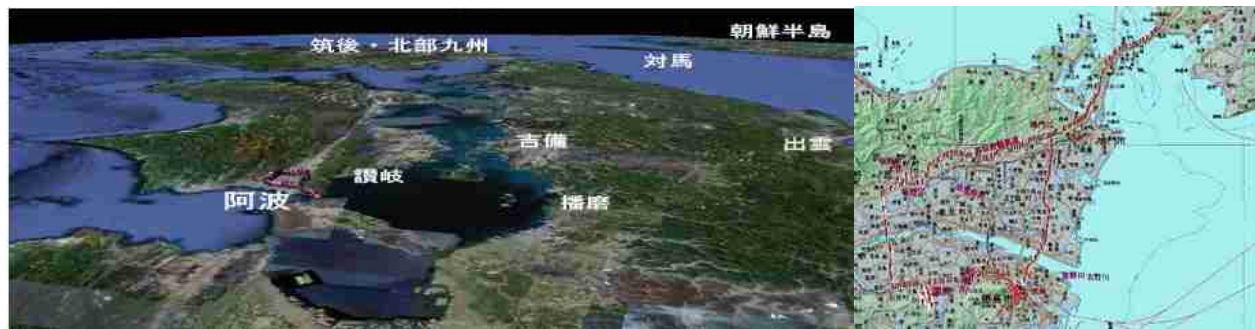
今回 阿波の鉄の痕跡をたどった矢野遺跡 walk で大和王権の連合の有力国となりえた阿波の源泉を垣間見ることができました。
「阿波は地理的に東瀬戸内の重要拠点に位置したから」程度にしか思っていなかったのですが、鉄器加工の先進地であるばかりで
なく、国づくりに必要な当時の先端技術を縄文時代から育んですでに有していたことをはじめて知りました。

● 阿波独特の文様 弧帯文土器

● 吉野川から産する「王者の石」阿波の青石・結晶片岩とそれを使った墳墓築造技術

- 北部九州とほぼ同時期に鍛冶加工をおこなっており、北部九州とのダイレクトな交流があったと考えられている。





4. 阿波 鍛冶工房から砂鉄が出土 弥生の大集落「矢野遺跡」を訪ねる

阿波の国の概説 1. 弥生の村から阿波の国へ



両側を険しい山が聳える中央構造線が東西に四国北岸を貫く。

その中を西から東へ大河 吉野川が流れ下る。 この吉野川流域は縄文時代から数多くの人達が住み着いた先進地で、この吉野川の下流河口域を中心に古代 初期大和王権を支えた阿波国が築かれる。

弥生・古墳時代から古代にかけて、現在徳島平野が広がる吉野川河口域は東に開ける深く広い大きな入江になっていて、大陸・朝鮮半島から北部九州を経て畿内・大和へと続く「和鉄の道」の東四国の玄関口として大いに繁栄してゆく。

弥生時代の中期後半から後期初頭にかけて 吉野川下流域北岸の阿讃山脈の山縁や吉野川の南岸 四国山地の東端 眉山・気延山の麓 吉野川に流れ込む鮎食川の扇状地には 鉄器や鉄器関連遺物が出土する拠点集落（ 北岸：光勝院寺内遺跡・カネガ谷遺跡

南岸：矢野遺跡・名東遺跡・高川原遺跡など」 が形成され、それらの地域が流通・交易拠点として 周辺地域を巻き込みながら次第に大きくなると共に、この地を治める有力豪族も生まれ、次第にひとつの国 阿波国としてまとまり、初期大和王権を支える有力国のひとつとなってゆく。

律令体制下になると畿内と四国を結ぶ「南海道」は紀伊の国賀太（加太） 駅から淡路国福良駅を通過して、阿波国牟岐の海（紀淡海峡）を渡り、石濃駅・郡頭駅を経て讃岐国引田駅から四国北岸を西へ向かう。

一方、その支路は引田から南へ阿波国国府へとつながり、吉野川河口域は東西を結ぶ陸路・海路の拠点として発展してゆく。

扇状地の北岸の気延山山麓に初期大和王権との結びつきを示す前方後円墳・前方後方墳大きな古墳を築く。



図2-3-6 徳島県各地区分 出典：徳島県「徳島県環境白書」

阿波の国の概説

2. 徳島・阿波国に見る日本誕生

ー弥生時代後期 村から国へ動乱の時代から 古墳時代 古代国家への胎動へー

徳島県立埋蔵文化財センター展示より 再整理 2010. 2. 6.



【弥生時代後期 動乱の時代】

「魏志倭人伝」に記された「倭国大乱」は弥生社会全体を巻き込んだ動乱。その結果 岡山（吉備）や近畿（近畿）の集団は勢力を伸ばした。時代のうねりは徳島にも及ぶ。阿波では30遺跡43口の銅鐸が知られる有数の銅鐸出土地域で、銅鐸の埋納しているが、銅鐸の埋納と相前後して、記号や絵画とは異なる思想を表現した弧帯文が流入し、朱や勾玉の製作や鉄器生産に専従する人々が出現。鮎喰川流域で製作された土器群は東部瀬戸内海から大阪湾岸に拡散し、朱や玉介した交流が拡大する。肥大化した集落を中心に地域はまとまり、村から国へ社会が移ってゆく。

（鉄器も同じだろう。弥生時代後期 武器・工具・農耕具 全体に急速に鉄器の需要が拡大。徳島では鉄器のほとんどが期を通じて 鮎喰川流域 矢野集 落遺跡や庄・蔵本遺跡からの出土であるという。）

弧帯文土器

土器などに施される文様の一つ。

直線と曲線の組合せにより表されている。徳島県内では矢野遺跡、黒谷川郡頭遺跡、井出上遺跡から出土した土器にみられる



【弥生時代末期から古墳時代前期 倭の酋長連合】

各地に国ができた頃、首長個人を葬る弥生墳丘墓が出現する。墳丘墓は地域食が強く、徳島では突出部を持つ円形の積石墓が造られ、儀礼用の小型時が備えられた。その後、中部瀬戸内から近畿にかけた地域の首長たちは、各地の葬送儀礼や首長権を統合し、政治的連合のしるしとして、長大な竪穴式石室を持つ前方後円墳を創りだした。首長連合が広がるに連れ、前方後円墳は列島各地で築造され、倭における国家の原形が固まってゆく。

【古墳時代中期・後期 古代国家への胎動へ】

古墳時代中期は前方後円墳の大型化と乗馬・須恵器・横穴式石室などの新しい技術によって特徴づけられる。後期には、横穴式石室が家族墓として中小の首長層にも広く採用され、吉野川流域を中心に地域職の強い石室が作られた。有力農民層による新たな農耕地の開発が進む一方で、塩・鉄・土器などの生産に組織化された工人の活動が始まる。中央集権国家体制が推進されるにしたがって、古墳の築造は徐々に終焉を迎える。

阿波の国の概説

3. 阿波と初期大和王権とのかかわり

「大和王権の成立に大きな役割を演じた阿波の力の源泉は何だったのだろうか??」

「また、鉄に結びつけるのか」といわれるのを承知で 手元についたあるいくつかの資料を繰ってみました。

数年前に二上山博物館へ行った時に買った「ふたかみ邪馬台国シンポジウム6 『邪馬台国時代の阿波・讃岐・播磨と大和』」(香芝市教育委員会・香芝市二上山博物館 2006)の資料やインターネット検索で矢野遺跡など弥生時代の後半から古墳時代の吉野川流域の遺跡について事前学習。

邪馬台国が存続していた3世紀 大和の王墓である大和ホケノ山古墳の「石囲い木棺」や石棺の石囲いの特異な多重構造の埋葬施設は阿波や播磨の王墓の古墳と共通性があり、同時代の王墓に中国鏡を副葬するのも東部瀬戸内に集中分布。大和と吉播磨・阿波との密接な関係がうかがえ、大和王権を象徴する前方後円墳の主要構造のうち、墳丘上に樹立される埴輪は吉備の特殊器台や特殊壺に起源を持つ。また、前方後円墳の中核部である長大な竪穴式石室は阿波で発達したもの 墳丘を覆う葺き石は東瀬戸内の積石塚と関係するといわれる。 また、徳島の結晶片岩と呼ばれる薄青色の石が初期の墳墓の石郭に使われた例がかなりあることなど、この地域の土器ばかりでなく、王墓築造の技術にも大きくかかわり、初期大和王権に東瀬戸内の諸国・阿波が大きな役割を演じてきたことがわかる。

ふたかみ邪馬台国シンポジウム6 『邪馬台国時代の阿波・讃岐・播磨と大和』

東部瀬戸内とヤマトより

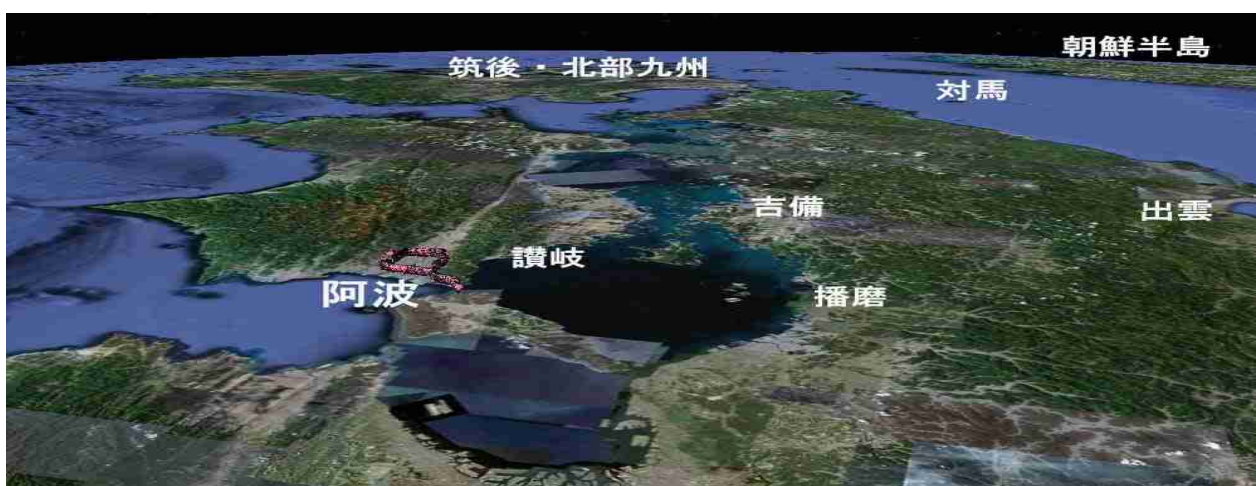
この諸国の力の源泉は何なのか・・・

初期大和王権を支えた西日本連合の結びつきの中核に朝鮮半島の鉄の支配権・鉄の流通路の確保があったといわれ、卑弥呼・初期大和王権誕生前の時代は倭の大乱と呼ばれる戦乱の時代であったことと考え合わせると、「鉄の道」の大和への玄関口に位置するこれら東瀬戸内諸国の役割が必須だったと考えられる。

そんな倭の力の源は何なのだろうか・・・ 通商路の拠点を押さえたことばかりではなからう。

そんな阿波の力の源になったのは阿波の国の生産力。 その特産品が「朱」「勾玉」の生産そして上記した吉野川流域で出る薄青色で光る墳墓石郭材料の「結晶片岩」であると知りました。そして「鉄器生産」も????

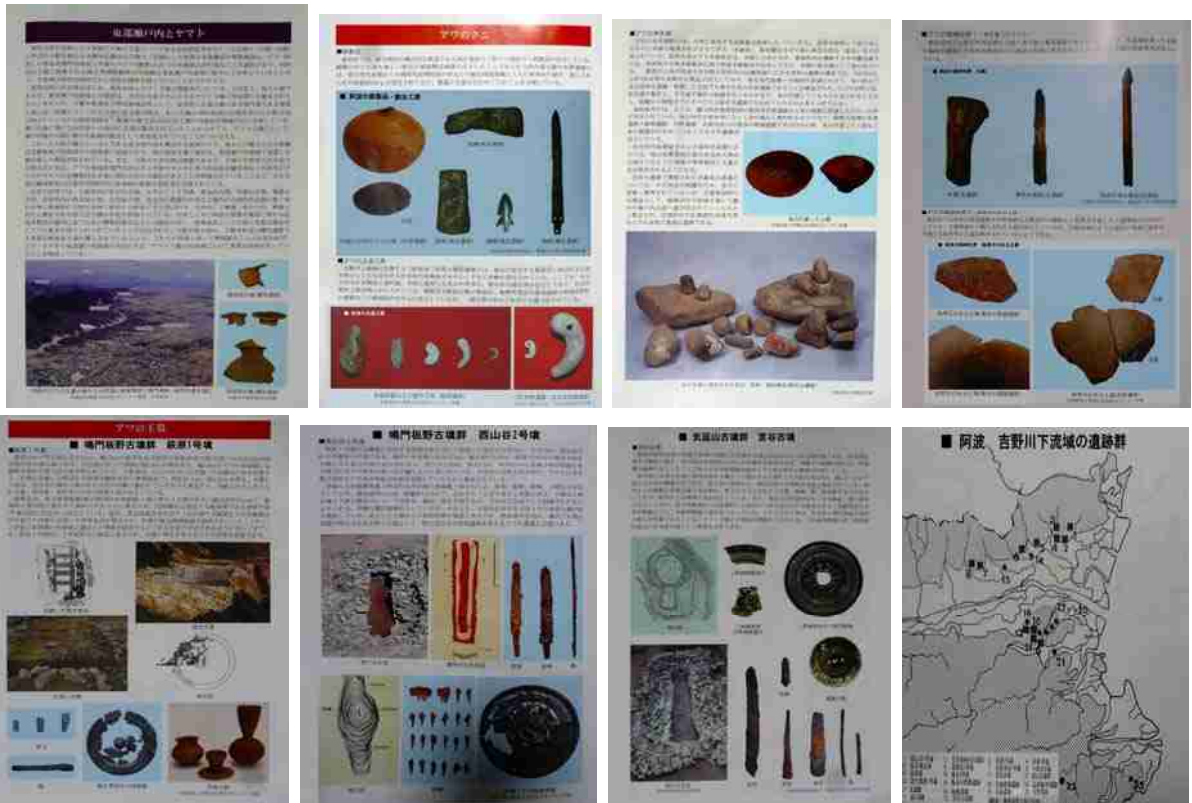
初期大和王権の有力諸国のひとつとして ぼんやり 阿波をイメージしていましたが、やっぱり阿波は大きな力をもっていたのだらうと。 ついでながら 吉備は鉄と塩 讃岐は塩・サヌカイトが国力の基かもしれません。



Google 写真 阿波を取り巻く周辺諸国

阿波の国のアウトライン理解の助けとして「ふたかみ邪馬台国シンポジウム6 『邪馬台国時代の阿波・讃岐・播磨と大和』」の口絵にあった資料ほかをそのまま転記させていただきました。

また、この中に ぜひ見たかった矢野遺跡の鍛冶工房内から見つかった「砂鉄」の写真もありました。



「ふたかみ邪馬台国シンポジウム6
『邪馬台国時代の阿波・讃岐・播磨と大和』」の口絵より



吉野川下流域北岸 阿讃山脈の山裾 四国山地の最東北端 鮎喰川の扇状地 国府地区
阿波国 弥生の終末期・古墳時代初期 阿波の王城の地



阿波国の中心に展開した四国山地の最東北端 鮎喰川の扇状地 国府地区
写真上端が 右から左（西から東）へ流れ下る鮎喰川 写真中央南北に貫く国道192号 国府地区の中心

4. 阿波 鍛冶工房から砂鉄が出土 弥生の大集落「矢野遺跡」を訪ねる

【参考】 「ふたかみ邪馬台国シンポジウム6

『邪馬台国時代の阿波・讃岐・播磨と大和』の口絵 転載

東部瀬戸内とヤマト

邪馬台国が存続した3世紀の大和の王墓の一つである奈良県桜井市ホケノ山古墳の「石囲い木槨」と呼ばれる柩を納める木槨や石槨を石で囲う「石囲い」の特異な多重構造の埋葬施設は、アワ（阿波）の徳島県鳴門市萩原1号墓やハリマ（播磨）のたつの市綾部山39号墳などと共通性があり、同時代の王墓に副葬される画文帯神獸鏡等の中国鏡も東部瀬戸内地域に集中して分布していることから、当地域は邪馬台国時代から密接な関係を持っていたことがうかがえる。

邪馬台国の所在地をはじめ、邪馬台国とヤマト王権の関係等については、古代史上、最大の謎であるが、東部瀬戸内地域との関係は、次代の大和を中心とするヤマト王権の形成期にも継承されたものと考えられ、王権中枢地及び周辺地域以外として、定型化した最古級の前方後円墳である箸墓古墳と近い時期につくられた大型の前方後円墳は、キビ（吉備）の岡山県岡山市浦間茶臼山古墳（全長138m）やハリマの兵庫県姫路市丁瓢塚古墳（全長104m）など瀬戸内海沿岸地域付近に分布している。瀬戸内海に開けた沿岸沿いの高台に古墳が築造されていることからみても、ヤマト王権にとって、瀬戸内海が大陸に繋がる航路の拠点として重要視されていたことがうかがえる。

これらの大和王権のシンボルである前方後円墳を構成する要素のうち、墳丘上に樹立される埴輪は吉備地域の特殊器台や特殊壺に起源があり、墳丘斜面を覆う葺石は、東部瀬戸内地域で発達した積石塚との関係が説かれている。また、今後の大きな検討課題であるが、古墳の中枢部である長大な竪穴式石室は、アワの徳島県鳴門市西山谷2号墳やサヌキの香川県高松市鶴尾神社4号墳等のアワやサヌキの石室構築技法を基に創出された可能性があることが指摘されていることなど、主な古墳の構成要素には邪馬台国時代の各地域の墓制や祭祀等が反映されている。

近年の研究では、大阪府内の松岳山古墳、玉手山7・9号墳、紫金山古墳、將軍山古墳、關鷄山古墳、兵庫県内の西求塚古墳、五色塚古墳、奈良県の燈籠山古墳など畿内の古墳時代前期の数十基の古墳に徳島県の吉野川流域で産出する結晶片石と呼ばれる「光る石」で構築、あるいは、構築されたと推定される竪穴式石槨の存在が指摘されている。石材とともに阿波の墳墓の築造に関わる技術者集団が畿内に來て石室の構築技術を伝えた可能性が高く、埋葬施設という古墳の重要な構成材にアワの要素が採り入れられていることが注目される。大阪平野を始め、王権中枢部の纏向遺跡でも多量の阿波系土器が搬入されていることも、これらの現象と決して無関係なこととは思われず、アワ・サヌキの東部瀬戸内地域の首長たちは、ヤマト王権の形成期にかけて重要な役割を任っていたことを物語っている。



3世紀のアワの王墓が集中する阿讃山脈東南部と鳴門海峡・紀伊水道を望む
※徳島県埋蔵文化財総合センター撮影・写真提供



讃岐系の壺(纏向遺跡)



阿波系の壺(纏向遺跡)
※桜井市教育委員会所蔵

アワのクニ

■鉄製品

徳島県では、弥生時代の拠点的な集落である南庄遺跡など数十の遺跡から鉄製品が出土している。銅鐻の中でも最も新しい型式の装束櫛文銅鐻が出土したことで知られる県内最大級の矢野遺跡では、弥生時代後期から古墳時代前期初頭の銅などの鍛冶関連遺構とともに鉄素材や鉄片、壺に入れた砂鉄約200gが発見されており、鉄器の生産が行われていたことを示唆している。

■阿波の鉄製品・鍛冶工房



■アワの玉造工房

吉野川上流域に位置する三好郡東三好町の稲持遺跡では、地元で産出する蛇紋岩と呼ばれる石材を原石とした勾玉を作る弥生時代後期後半を中心とする工房跡が発見されている。ここでは、勾玉や勾玉の未製品と剥片他、生産に使用した台石や叩き石、筋のある砥石等が出土しており、勾玉の製作工程が明らかにされている。類似する蛇紋岩製の製品は、板野町黒谷川郡頭遺跡や阿南市若杉山遺跡などの徳島県内を中心に出土しているが、一部は香川県など県外にも運び出されている。

■阿波の玉造工房



■アワの朱生産

古代の赤色顔料には、天然に産出する赤鉄鉱を粉砕した「ベンガラ」、辰砂を粉砕して取り出したものと水銀と硫黄を化合させて作る「水銀朱」、鉛を酸化させて淡い赤色を得る「鉛丹」などが知られている。辰砂を産出する水銀鉱床は、各地に分布するが、徳島県内を横断する中央構造線上には、奈良県の大和水銀鉱床に続く阿波水銀鉱床が分布しており、水銀の産出地として知られている。那賀川上流の阿南市水井町の若杉山の山腹斜面に広がる若杉山遺跡の調査では、石臼40点、石杵350点等の多数の石製品が出土しており、弥生時代後期～古墳時代初頭にかけて、朱の原石である辰砂を採掘・精製した全国でも希少な朱の生産遺跡であることが確認された。石臼や石杵には、叩き潰す動作と、すり潰す動作の痕跡をもつものがあり、朱の付着しているものも見られることから、採掘から精製までのすべての工程が当遺跡で行われていたものと考えられている。

徳島県内では、古くは、縄文時代後期初頭の徳島市矢野遺跡から朱の精製に関連した石臼・石杵が発見されている。弥生時代中期末頃になって朱が盛んに使われるようになり、鮎喰川流域の名東遺跡や鮎喰遺跡、矢野遺跡、吉野川河口の黒谷川郡頭遺跡でも石臼や石杵、朱の付着した土器など朱の精製が行われていたことを示す遺物が出土している。

弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけては、岡山県橋築墳丘墓や奈良県天神山古墳などのように墳墓の埋葬施設に大量の朱が使用されるようになる。

若杉山遺跡で精製された水銀朱の流通については、その同定が困難なため、十分に把握・解明されていないが、古墳築造時の必需品として、鮎喰川の下流域を通して畿内や瀬戸内方面へ運び出されていたものと推定され、古墳時代の広範囲な流通を知る上でも非常に重要な遺跡である。



朱の付着した土器

※徳島県立埋蔵文化財総合センター所蔵



朱の生産に使用された石臼・石杵・辰砂原石(若杉山遺跡)

※徳島県立博物館所蔵

■アワの精神世界1－木を使ったマツリー

徳島県内でも弥生時代前期から続く最大級の集落遺跡である庄原遺跡からは、祖霊像を象った木偶や銅剣を模倣した剣形木製品などの集落の祭祀に使用されたと推定される木製の祭祀用具が出土している。

■ 阿波の精神世界 木偶



木偶(庄遺跡)



剣形木製品(庄遺跡)



用途不明木製品(庄遺跡)

※徳島市教育委員会・徳島市立考古資料館所蔵

■アワの精神世界2－弧帯文のある土器－

徳島県では黒谷川郡頭遺跡や矢野遺跡など数箇所の遺跡から弧帯文を施した土器等約15点が出土している。吉備地域から搬入された土器が出土しているが、吉備地域のように墳丘の祭祀に弧帯文を施した器台等の土器は使用されていないようである。

■ 阿波の精神世界 弧帯文のある土器



弧帯文のある土器(黒谷川郡頭遺跡)



弧帯文のある土器(黒谷川郡頭遺跡)



内面



外面

弧帯文のある土器(矢野遺跡)
※徳島県立埋蔵文化財総合センター所蔵

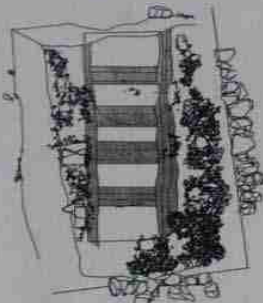
アワの王墓

■ 鳴門板野古墳群 萩原1号墳

■ 萩原1号墓

直径18mの円丘部に長さ8.5m、幅3.6mの低平な長方形の突出部(前方部)を持つ全長26.5mの前方後円形の積石塚である。円丘部に沿って周囲に幅1.8mの溝があり、幅3.6mのくびれ部両側には壘棺を納めた竪穴式石室が作られている。主体部は、円丘の中央に石で囲った木槨内に棺を安置する「石囲い木槨」と呼ばれる特殊な構造を持つ埋葬施設で、残存長4m、幅1.25mを測る。木槨の上面は、長方形の壇状に築かれた白色の円礫で覆われていたものと推定され、供献されたと考えられる壺・台付壺・高杯等の小型の精製土器が出土している。

副葬品は、画文帯神獸鏡(画文帯同向式神獸鏡)1面と管玉3点等がある。鏡は直径16.1cmで、副葬時に意図的に割られて納められたものと推定され、同型鏡が公孫氏の支配地域である朝鮮半島(平壤大同江付近)から出土している。近年、奈良県桜井市のホケノ山古墳や兵庫県たつの市綾部山39号墓でも同様の石囲いの埋葬施設が発見され、同種の画文帯神獸鏡が副葬されていたことから、3世紀の東部瀬戸内地域と畿内との関係进行研究の上であらためて注目されるようになってきている。萩原1号墳は、3世紀前半の築造と考えられ、古墳の発生を考える上でも貴重な墳墓である。



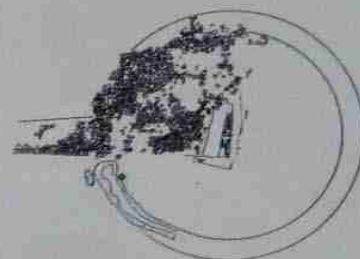
石囲い木槨平面図



墳丘全景



石囲い木槨



墳丘図



管玉



鏡



画文帯同向式神獸鏡



供献土器

※徳島県立埋蔵文化財総合センター所蔵

■ 鳴門板野古墳群 西山谷2号墳

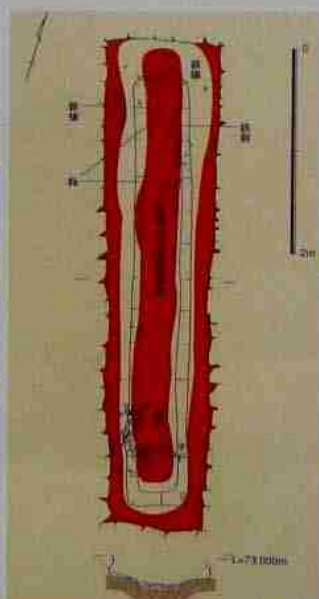
■ 西山谷2号墳

萩原1号墓の近隣地に所在する尾根を削り出して整形した墳丘の長径20m、短径18m、高さ約2mの不整形の円墳である。墳丘の中央部に長さ4.72m、幅北端で1.05m、南端で0.83mの南北方向を主軸とする長大な竪穴式石室がある。竪穴式石室は、南北6.5m、東西4.8mの墓壙全体が結晶片岩と呼ばれるアワ特有の青い石で覆うように造られている。石室内には粘土床があり、その上に朱を敷き詰めたU字形の刳拔式木棺を安置していたものと推定されている。

斜縁上方作銘獣帯鏡と呼ばれる中国製の青銅鏡1面をはじめ、鉄剣、鉄槍、鉄鏃、土器などが出土している。鏡は面径12.5cm、重量約157.6gで、右回りに「上方乍竟大王青龍白虎子」の銘文と神仙像と5体の獣形のレリーフがある。鏡は一部を欠損するが、当時は完全品として副葬されたものとみられる。同種の鏡は数例出土しているが、そのうち、広島県広島市中子田1号古墳出土鏡が最も類似している。出土した土器から3世紀中葉の築造と考えられ、徳島県内を始め、畿内でも最古段階の竪穴式石室を持つ古墳として、竪穴式石室の出現過程を考える上でも重要な古墳である。



竪穴式石室



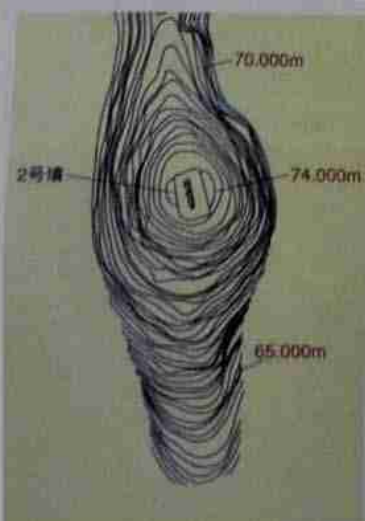
遺物出土状況図



鉄剣

鉄槍

鉾



墳丘図



鉄鏃



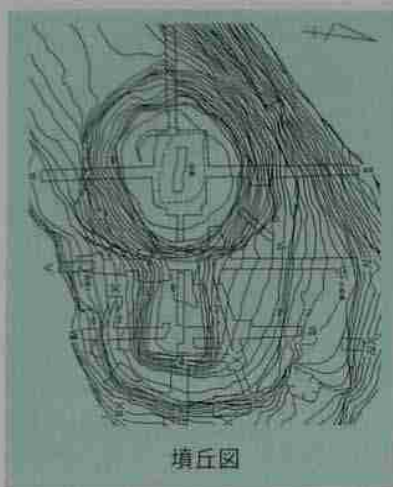
斜縁上方作銘獣帯鏡
五国分館文化財総合センター所蔵

■ 気延山古墳群 宮谷古墳

■ 宮谷古墳

徳島平野西南部の気延山東端の尾根上に位置する墳丘長約37.5mの前方後円墳である。前方部は低平で撥形に開き、後円部は直径約22～25mの不整形な形状をなす。西眼下の鮎喰川岸には、袈裟埴文銅鐸が出土したことで知られる矢野遺跡を始めとする弥生時代の集落が分布している。

後円部のほぼ中央部に東西方向を主軸として割石を小口積にした内法全長5.95m、幅1.2～1.3mの竪穴式石室が構築されており、粘土床の形状から、棺は朱塗りの刻板式木棺と推定されている。棺内からは倭製の重圏文鏡1点を始め、管玉やガラス玉などの玉類、鉄鏃、鉾、板状鉄斧などが出土しており、棺外からは鉄剣1点が出土している。また、墳丘くびれ部付近からは土師器二重口縁壺が出土したほか、前方部裾部からは盗掘時に石室内から持ち出された可能性がある三角縁張是作大神四獣鏡などの三角縁神獣鏡3面が見つかっている。このうちの1面は、奈良県天理市黒塚古墳出土鏡と同型鏡であることなどヤマト王権との密接な関係がうかがえる。三角縁神獣鏡を持つ徳島県内最古の前方後円墳として重要な古墳である。



墳丘図



三角縁神獣鏡片



三角縁唐草文帯神獣鏡片



三角縁張是作六神四獣鏡



竪穴式石室

※徳島市教育委員会提供



鉄鏃



重圏文鏡



鉄剣



鉄鉾



鉄斧



鉾

※徳島市教育委員会・徳島市立考古資料館所蔵

「村から国へ」 鉄器加工を始めた 弥生の大集落 矢野遺跡 概 説

北部九州とほぼ時期を同じく鉄器加工を開始 また 終末期には壺に入れた砂鉄を火事工房内に持っていた



吉野川下流域 鮎喰川の扇状地に広がる矢野遺跡 古代 阿波国府が置かれた阿波の中心地

今はその地を幅の広い国道 192 号線が南北に貫く その国道 192 号の下から 大集落 矢野遺跡が出土した

矢野遺跡は、徳島市国府町矢野にあり、吉野川の支流、鮎喰川左岸の標高 10m 前後の微高地に位置しています。

1992 年（平成 4 年）から始まった徳島南環状道路建設に伴う発掘調査により、南北約 2km、東西約 1km の範囲に拡がり、縄文時代から中世にかけての、非常に大きな遺跡で、特に徳島県内の弥生時代の中心的な役割を果たした集落であることが分かりました。

縄文時代の遺構は 現在の地表面から 2～4m 下層より発見された低地性の集落。道路建設に伴う 1994 年（平成 6 年）～1998 年（平成 10 年）にかけて行われた発掘調査により、竪穴住居跡 19 棟などの遺構が検出された。

土器と石器に水銀朱が付いていたが、多くは朱の精製時についたものと見られており、朱の精製としては全国的に見ても古い段階のものである。遺物には、土器（深鉢・鉢・浅鉢・双耳壺）、石器（石鏃・石匙・石錘・石斧・磨石・台石など）がある。

土器の表面はへう描の区画に縄文で埋めた文様によって華麗に飾られる（磨消縄文）。遺物の中で特殊なものに石棒・円柱状土製品・亀形土製品があり、特に土製仮面が注目される。顔面全体に丸い道具で突き刺した模様がある。

西日本でも有数の遺構と遺物に恵まれた縄文時代の集落である。



弥生時代の竪穴住居跡群



縄文の竪穴住居遺構



縄文土器に描かれた蔵手（わらびて）形文様

土器



土面



水銀朱の精製ジオラマ

弥生時代の遺構は 現在までに、竪穴住居跡 約 100 棟が見つかった。調査の結果弥生時代の中頃から終わり頃にかけての竪穴住居跡が 100 軒ちかく検出され、徳島県内で最大級の集落遺跡であることが確認できました。そして、5～10 軒が一つの群をなし、住居と住居は数 m の間隔で存在していたことも分かりました。

弥生時代の一集落の規模が確認されたのは、県内で初めてのことです。

大量の遺物の中で、とくに注目されるのは銅鐸である。

鐸と呼ばれる縁の部分に太い線で飾る突線鈕式と呼ばれる銅鐸の中でも最新型式。

銅鐸は木製容器に納めて埋められたと考えられ、土坑の周りには、7 本の柱穴が確認されている。

このような埋納状況が判明した銅鐸は非常に珍しく、銅鐸の謎を解く鍵となる。

1995 年に重要文化財（考古資料）に指定された。

そのほか、鉄器を製作したと考えられる鍛冶遺構も見つかっており、集落内での鉄器生産を考える上で興味深い。



矢野銅鐸の発掘

銅鐸が発掘調査で発見されることは大変珍しいことです。耕作中などに突然発見されることが多く、銅鐸が埋まっていた様子などを観察することができないケースが大半です。

矢野銅鐸は、1992 年（平成 4 年）12 月、埋蔵文化財発掘調査中に発見されました。

慎重な発掘調査によって、銅鐸を覆（おお）った土の状態や、銅鐸を埋めた穴（埋納坑（まいのうこう））を取り囲む柱穴を確認することができました。

その結果、矢野銅鐸は木製容器に収められ、ていねいに土を被せて埋められたこと、その穴の周囲に掘立柱建物があつたことなどを復元するに至りました。



矢野銅鐸 埋葬状態

矢野銅鐸 銅鐸は竪穴住居跡に隣接して、銅鐸埋納坑が検出された。

集落内での銅鐸の出土は、全国的にも類例が少なく、銅鐸出土数の多い徳島県においても貴重な例である。

銅鐸が埋納されたのは、今から約 1800 年くらい前の弥生時代終わりごろ。銅鐸を埋める穴の上に、棟持柱をもつ建物を建て、銅鐸のひれという部分を上下にして埋められています。銅鐸埋納坑に柱穴や建物跡が伴う例は、矢野遺跡と島根県の荒神谷遺跡だけ

です。銅鐸の埋納にあたって、マツリが行われていたと考えられている。

矢野銅鐸は、高さが97.8cm、ひれを含めた最大幅が44.8cm、厚さが約2.9mm、重さが約17.5kg、底の口径が37.4cmです。この大きさの銅鐸は最新式のものといえます。古いタイプの銅鐸は小さくて、音を鳴らし「聞く」銅鐸、それがだんだん大きくなり、置いて「見る」銅鐸に変わってきたと考えられています。

銅鐸がどのように使われたのか、なぜ埋められたのか、謎に包まれています。

矢野遺跡の朱

徳島県は、朱の産地として全国的に知られていますが、矢野遺跡は縄文時代から古墳時代初頭という長期間にわたって朱の生産に関わった重要な集落でした。

矢野遺跡の勾玉作り

矢野遺跡からは、蛇紋岩（じゃもんがん）と呼ばれる石で勾玉を作っていた工房が発見されました。



名東遺跡出土の水銀朱精製石杵



辰砂の鉱石



若杉山遺跡出土品

名東遺跡は 矢野遺跡を挟んで東側 鮎喰川右岸の沖積地上、標高約10mの微高地上に立地する縄文時代～中世にかけての複合遺跡で、縄文時代晩期の土器が出土や 水銀朱の精製と銅鐸が埋納された弥生時代の集落。

また、徳島県は全国的に有名な朱の生産地で原料の辰砂の採取地は阿南市の若杉山遺跡。

那賀川をさかのぼり、若杉山標高140～170mの山腹斜面に遺跡が広がり、石杵・石臼や辰砂原石が大量に見つかっている。「朱」の原料辰砂は、赤色顔料ので、石杵や石臼などの石器を用いてこれを朱に加工する工程を若杉山遺跡で行っていたことがわかった。

出土土弥生時代の終わりから古墳時代の初めまでが、朱生産のピークと考えられる。

全国的にみても辰砂を採掘する遺跡として唯一のものである。

鉄器を作る工房跡

SB2037（弥生時代中期末～後期初頭）

SB2037は円形の竪穴鍛冶遺構（たてあなかじいこう）です。中央部から鍛冶炉（かじろ）2基が検出されました。周辺および柱穴内から鍛冶滓（かじさい）、三角鉄片、鍛造剥片（たんぞうはくへん）、14cm、幅5cm、厚さ2cm、重量500gの鉄素材が出土しました。

SB2044（古墳時代初頭）

SB2044は隅丸（すみまる）長方形の竪穴鍛冶遺構です。遺構のほぼ中央から3段に掘削された鍛冶炉が検出されました。遺構内からは棒状切片や三角切片などの切片のほか、砂鉄入り壺が出土しました。



砂鉄入りの壺が出土した竪穴住居跡 SB2044

弥生時代になると、大陸から鉄器が持ち込まれ、弥生時代の中ごろには、日本でも作られるようになりました。この鉄鍬は弥生時代の終わりごろのものです。大きいもので長さが約10cm、幅がより約3cmあります。おそらく戦いの武器として使われたのだろう。

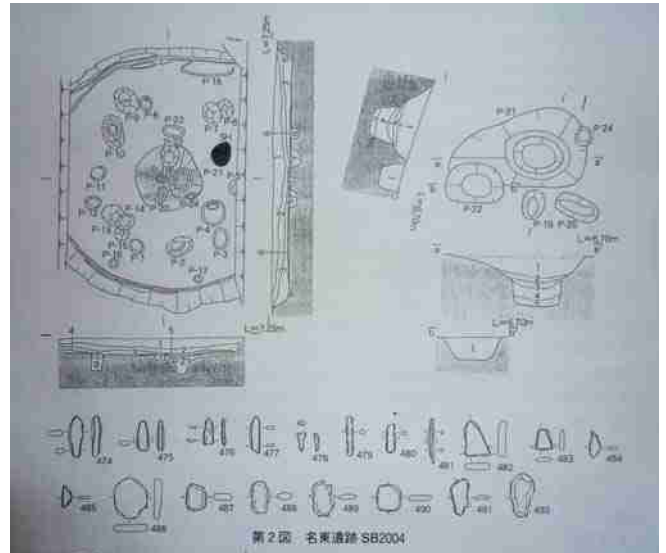


いずれにせよ、豊富な鉄素材の供給を受けられなかったことによるのか、鍛冶炉分布からは鉄器工房は鮎喰川流域に限られ、ほかへ広がっていないことから、鉄器の流通も主は吉野川流域近隣とではあると考えられしている。

1. 名東遺跡 SB2004 鍛冶遺構

名東遺跡 SB2004 鍛冶遺構は直径 5m を測る円形の
竪穴鍛冶遺構 時期は IV-3 様式 中期末の朱精製工
房と推定

遺構内より棒状切片・三角切片・不定形切片などが出
土。明確な鍛冶炉は出土していないが、黒で示されて
いる SH・EP22 の周辺床面の焼けこみ大量の炭化粒が
検出されたことから 鍛冶炉があった可能性が想定さ
れている。



- 一般国道 192 号徳島南環状線建設に伴う 1992 年埋蔵文化財調査で出土した

鍛冶遺構がある弥生時代後期後半の円形の竪穴住居跡 SB2001

〔徳島県埋蔵文化財センター年報/vol. 4 1992 年度〔名東遺跡〕- 徳島埋文情報より〕

西半分が調査区外に拡がっているため東西の径は不明であるが、南北の径は 8m で、深さは 0.35m を測る。

南北の両端にはそれぞれ張り出しの施設を伴っている。

床面よりやや上部の埋土中からは、焼土の拡がりや炭化材片の分布が確認された。

柱穴は周囲に 3 本と中央部分に 1 本検出されており、住居跡の構造は周囲に 4 本、中央部に一本の主柱穴で構成されて
いる。炉跡は中央部の柱穴からやや南寄りに、直径約 30cm、深さ 5cm ほどの浅い掘り込みを利用している。

2. 矢野遺跡の鍛冶遺構

2.1. 矢野遺跡 I 群 SB1035 円形の竪穴鍛冶遺構

時期は IV-3 様式 中期末で 3 回の建て替え
が確認された。最初の住居は復原下端径
6.0m 深度 54cm を測る。

一回目住居廃絶後に南側 2/3 に重なって
下端径 5.8m の円形住居が構築されている。
6 本柱構造で中央部から鍛冶炉が検出され
た。北側鍛冶炉は長軸 185cm 短軸 60cm 深
度 10cm を測る長楕円形を呈する。中央部底
面 50X40cm が被熱により赤変している。

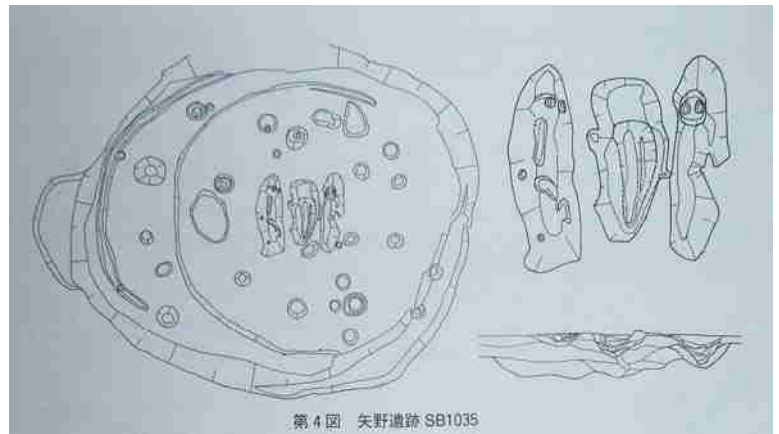
南側からほぼ同規模の炭化物を充填した鍛

冶炉が検出された。炉東端部に位置するピット壁面と底面が被熱により赤変している。両炉共に下部構造は共通して
いる。床面から 35cm 程度掘削後に炭化物と地山土を交互に充填している。

こうした炉の形態から I 類鍛冶炉（村上恭通氏による鍛冶炉分類）
と推定される。

周辺および柱穴内より鍛冶滓・三角鉄辺・鍛造剥片が出土している。

3 回目の住居はやや拡大し、下端 6.8X6.6m の規模を測り、2 回
目住居跡地に 10cm 程度の盛土を充填し構築し、中央部に鍛冶炉が
敷設されている。鍛冶炉は長軸 185cm 短軸 135cm 深度 30cm を測り、
長楕円形を呈する。下部構造は粘質土と炭化物層を互層に充填さ
れている。炉壁面に沿って焼く 20cm 内外の結晶片岩の割石を検出
された。



割り石は被熱による赤変が観察され、作業時には配されていた。

炉内から鍛冶滓や鉄片が、貼り床部より鍛造剥片が検出されたほか、床面からは赤変した砥石・40cm 大の円盤状結晶片岩の割り石〔片面に赤色顔料が付着〕が出土。住居西側床面より、長さ 14cm 幅 5cm 厚さ 2cm 重量 500g を測る鉄素材が出土した。

2.2. 矢野遺跡Ⅱ郡 砂鉄が出土した鍛冶遺構 SB2044

矢野遺跡Ⅱ郡 SB2044 は長軸 5.9m 短軸 5.6m 床面積 27 m²を測り、隅丸長方形の竪穴鍛冶遺構。時期は庄内式併行期。工房のほぼ中央から 3 段に掘削された鍛冶炉が検出された。長軸 200cm 短軸 180cm 深度 7cm を測る浅い楕円形の第一段掘り込みの中央付近に長軸 130cm 短軸 60cm 深度 30cm の長楕円形の第二段掘り込みがある。さらに第 2 段掘り込みの南壁面を共有して長軸 64cm 短軸 30cm 深度 10cm を測る長楕円形の第三段掘り込みが掘削されている。住居床面から第三段掘り込み底部まで 47cm を測る。第一段掘り込み中央部やや北寄りには焼土層が観察された。

周辺には焼土層や炭化物混じりの褐色砂質土層が広がっている。第 2 段掘り込みには壁面に沿って粘性の強い明黄褐色砂質土が充填されている。この充填土の上面には数種類の炭化物を多く含む黒褐色砂質土が充填されている。

第三段掘り込み内部にはやや粘性の強い灰黄褐色砂質土が充填されている。

こうした状況から第三段掘り込み内の灰黄褐色砂質土と第二段掘り込み内の明黄褐色砂質土は防湿を目的とした埋め土であり、第二段掘り込み内の黒褐色砂質土ハカーボンベッドとして充填されたと推定される。第二・第三段掘り込みが地下構造として認識できよう。一方 掘り込み壁面には除湿のための焼きしめは認められない。こうした炉形態から SB2044 鍛冶炉はⅠ類鍛冶炉と考えられる。ただし 地下構造には省略が認められる。

遺構内からは棒状切片や三角切片などの切片は多数出土しているが、鉄滓・粒状滓は出土していない。

このことからこの遺構では、失敗品・未製品・鑿切り技法等によって生成した鉄板を素材として再度製品を作る R 工程が行われたと考えられる。しかも粒状滓・鍛造剥片が検出されないことから、融接・鍛接を行わず、鑿切り技法により小型の製品を作る R2 こうていであったと推定される。

〔高温鍛造・鍛接や精錬鍛冶は行われていないという意味だと理解される。〕

後期後半以降 矢野遺跡Ⅱ郡においては鉄滓や粒状滓が出土していないことから C 工程(鍛錬鍛冶)が行われていたとは考えがたい。

この SB2044 からは板状切片や棒状切片と共に砂鉄入り壺が出土している。

1. 砂鉄を攻玉用研磨剤として捉える。

日本海沿岸など玉生産と鍛冶が密接な関係にあることはすでによく知られており、矢野遺跡でも玉加工が行われ

ていたことから、この砂鉄が研磨剤として持ち込まれた可能性がある。

ただし、北陸・日本海側での玉生産工房で砂鉄が出土した例はない。

2. 赤色顔料(ベンガラ)の原料として捉える。

吉野川下流域では 名東いせきはじ目、辰砂を利用した朱の精製が行われてきた。赤色原料には朱以外にベンガラがあり、ベンガラの原料として砂鉄を想定することも可能であろう。

3. 砂鉄を鍛冶関連遺物として捉える。

徳島では後期以降も恒常的に鉄素材が供給されており、鍛冶技術の低下も認められない。ただし、この砂鉄は四国以外からの搬入品であることが確認されているという。

したがって 砂鉄を使った製鉄の検討 供給された素材の変化で精錬鍛冶が模索され、精錬鍛冶に砂鉄が使われたという兆候はない。



これらから推察して 砂鉄が壺に入れられて鍛冶工房内に持ち込まれた理由は今もよくわからない。

矢野遺跡を含め、この鮎喰川流域の鍛冶工房で精錬鍛冶・鍛錬鍛冶など高温鍛冶が開始されていれば、この砂鉄がそれらに使われ、さらにそれが日本独自の製鉄 たたら製鉄につながってゆく道筋を考えていましたが、それはないようである。

